読売歌壇

小池　光　選

コンコースに黒板一つ「駅短歌」書いて行く人止まり読む人　大和郡山市　四方　護

【評】駅や街角にピアノを置いて、ゆきずりの人が自由に弾くことが広がっている。それにならって「駅ピアノ」ならぬ「駅短歌」というものができた、らしい。おもしろい。

凶器持ち立て籠もり犯人吾と同じ鈴木姓なるに憤り覚ゆ　吹田市　鈴木　基充

【評】いちばん多い姓は佐藤、次が鈴木。良いことをしても、悪事をはたらいても佐藤、鈴木は多い。立て籠もりの凶悪犯と同じ姓で、やりきれない。仕方ないことであるが。

置き薬の元気な人の今年来ず終りにしたいと言えずも終る　相模原市　大谷千恵子

【評】置き薬というものが昔からあるが、利用することがめっきり減った。時代の流れで終わってしまったのか。ちょっと寂しい。

ダイエット始めた妻は地雷でもあるかのように体重計踏む　山形市　柏屋　敏秋

夜祭りの習いの太鼓山国の秩父に冬の到来告げる　秩父市　大野龍太郎

今日もまた道の落葉を掃く媼どうもならぬとつぶやきながら　岡山市　西尾　照常

足重く歯医者に向かい治療中一首考え必死に考え　草加市　入江　幸子

十五年間宇多先生に投句して十八回の入選果たす　匝瑳市　椎名　昭雄

真逆とふ言葉使ふに興ざめす鏡花好みの女なれども　稲城市　山口　佳紀

亡き夫に阪神タイガースの優勝を観せたかったと心底おもふ　高石市　出水美智子

栗木　京子　選

まだコロナが尾をひいている病院で自己紹介はカーテンごしに　いすみ市　竹下　和江

【評】病院内では新型コロナウイルス感染への警戒が続いている。同じ病室の患者同士でも直接に向き合っての会話は避ける。「カーテンごしに」から状況が如実に伝わる。

便箋にミミズぬたくる励ましを百回読んでみるありがとう　相模原市　井上　桂

【評】電話やメールでなく手紙を書いてくれた人。悪筆であっても、その真心が嬉しい。「ミミズぬたくる」と貶しながらも百回読んだ作者。素敵な間柄の二人である。

何気なく言われた一言刺さりいてバスにも電車にも乗せてゆくなり　横須賀市　建部智恵子

【評】相手の一言に傷ついて、引きずっている。だが、その一言を「乗せてゆくなり」と客観視したことで心が軽くなったのでは。

裏日本なぞと呼ばれた頃懐かし新幹線で東京日帰り　糸魚川市　田鹿　静夫

北風は男体山のかなたより地上に降りて我が背を押せり　小山市　松本　道子

出会ひしは通信大学生の頃古稀過ぎてなほ続く友情　安中市　佐藤　志乃

ローカル線に遍路姿の異国人みずほの国の秋を見つめて　前橋市　西村　晃

老いるとは忙しき日々よ為さねばの半分もなせず夕陽は沈む　大津市　吉川　万代

白鳥の鳴き交わす声降るほどを全身に聴く立冬の朝　新発田市　片山恵美子

ポジティブな君との暮らし五十年皺は笑顔の数と思ひぬ　松戸市　川村安紀子

俵　万智　選

黒・白・紺・灰は干されて青空と夕空のない僕のベランダ　富士見市　松本　尚樹

【評】モノトーンの洗濯物で埋め尽くされたベランダ。現実には、ただそれだけの光景だが、言葉で丁寧に描写することで、うまく心象風景と重なった。色を干すとした表現や、青空、夕焼け空との色の対比が効果的だ。

ほんとうの手紙はいくつあるだろう今日も走れり郵便バイク　仙台市　小野寺寿子

【評】最近は、もっぱらダイレクトメールが多く、私信が届くのは珍しい。そういう現象に加え「ほんとうの」には、もう一層「心の真実」のようなニュアンスがあって印象深い。

真夜中に狼煙のような湯気を上げ麺に絡める生活がある　東村山市　巣守たまご

【評】充実感みなぎる夜食の歌。狼煙という勢いのある表現、結句のまとめかたも見事だ。

波のあるひとと云はれてああわたし海だったんだ泳いでいいよ　陸前高田市　藤田ゆき乃

まっすぐな道もジグザグ帰りゆくシジミチョウのようなランドセル　大和郡山市　大津　穂波

新宿のライブカメラにいるおれをおれがスマホが衛星が見る　ふじみ野市　雨雨雨汰

マンションの集合ポストに皆同じチラシ飛び出しアートのようだ　船橋市　田中　澄子

マヌカハニーってハワイアンな恋人呼ぶみたいで口角あがるね　仙台市　まつのせいじ

僕たちの言葉はすっかり秋となり柿の実みたいに甘くて硬い　八王子市　鈴鹿　直之

夢でしか会えない人に夢でしか言えない言葉、夢なのに言えず　船橋市　鳥畑　泉

黒瀬　珂瀾　選

青鷺よお前も寡夫か白鷺の群れより離れ遠くを見つむ　越谷市　藤谷　明

【評】群れる白鷺よりも一羽たたずむ青鷺に感情移入する。おそらく作者自身が孤独を感じているのでしょう。青鷺と一緒になって群れを見つめる作者の背中が見えるようです。

泣きながら父の遺体にキスをする少年よ君はガザを生き延びよ　京都市　小池ひろみ

【評】世界各地の紛争により、弱い立場の者たちがどんどん犠牲となる。人類そのものの未来が問われる時代に私たちがいること、ガザの苦しみへの連帯、それを考えたい。

心音をみんなに切り刻ませるため神話のような検査を受けた　川崎市　からすまぁ

【評】健康診断での心電図検査だろう。まるで眠る神のように電極をつけて横たわる。自分の心拍を人に見られるのも変な気分だ。

暗黒の錦江湾に腰据ゑて天に火を吐く桜島山　霧島市　内村としお

父と見た水平線を忘れない　佐渡の向こうに北朝鮮あり　千葉市　佐藤　綾子

戦時下を通りし吾が戦争を見ているだけかケーキ食みつつ　小平市　栗原　良子

春秋が消えたる四季に中庸を説きし先人何と思うか　東京都　大室　英敏

スーパーで一円二円を見る我を後ろから見るもう一人の我　狭山市　奥薗　道昭

また一枚耕作放棄の田圃増え峡の奥処は野に還りゆく　香取市　山之内俊一

神田明神の天水桶を造りしは鋳物師永瀬源七その他　川口市　高橋まさお

◇投稿規定◇　はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　◇毎週月曜日に掲載　右の影絵はずわいがに